

SONRISA

そんりさ

Vol.142



サンクリストバル・デ・ラス・カサス市におけるサパティスタ住民のデモ
行進には1万数千人が参加した（2012年12月21日、柴田大輔さん撮影）

「そんりさ」「微笑み」を意味します。レコムは様々な活動を通じて、ラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

サパティスタの新しいサイクル

- | | | |
|----|------------------------|-------------|
| 02 | サパティスタ運動の新しいサイクル | ……小林致広 |
| 09 | ボリビア・ワオラニ民族とビデオ制作 | ……溝口尚美 |
| 14 | グアテマラ・ジェノサイド裁判始まる | ……新川志保子 |
| 15 | 「心配ひきうけ人形」 CLIJALの活動から | ……内野史子 |
| 17 | アイマラの詩「農民の子」 | ……栗原重太 |
| 18 | 食巡り「アボカドソースの豚肉ソテー」 | ……ミゲル・アクーニャ |
| 19 | ニュースクリップ | ……サザエ |

2013年4月13日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

サパティスタ運動の新しいサイクル

2012年12月21日、「沈黙の行進」の告げるもの

小林 致広

「世界の終末」－13バクトウンの開始

2012年12月21日、「世界の終末」の日であるという「マヤの予言」を信じているか否かは別に、数多くの人々がメキシコ国内の主要な遺跡に赴いたとされる。メキシコ中央高原のテオティワカンやユカタン半島のチチェンイツァーの遺跡には、それぞれ1万人の訪問者があったとされる。この人数は、例年春分の日に行われる「太陽エネルギー摂取」のイベントの参加者数と大差ない。どうやら、「世界の終末」を本気で信じていた人はさほど多くはなかったようである。

このマヤの「世界の終末」に関連した数あるいくつかのイベントのなかでもっとも動員人数の多かったものは、メディアではほとんど報道されなかったが、メキシコ最南端のチアパス州でサパティスタ支持者が行った「沈黙の行進」であるといっただろう。

12月21日、チアパス高地の中心都市サンクリストバル市では、2万人以上のサパティスタ支持者がそぼ降る雨のなかを無言で行進した。チアパス州北部のパレンケ市では約8千人が中央広場で行進したが、その数は、同じ日にパレンケ遺跡を訪問した6千人を大きく上回っていた。グアテマラ国境に近いラス・マルガリータ市では8千人、アルタミラーノ市では5千人が中央広場に結集したとされる。ラカンドン密林に近いオコシンゴ市では6千人が行進したとされるが、トラックなどの輸送手

段の不足のため、かなりの人数が参加できなかとされる。

動員が5万人にも達するという今回の「沈黙の行進」は、1994年1月の武装蜂起によるチアパス州の7都市占拠を含め、サパティスタにとっても史上最大規模のものであった。

「12バクトウン終了、13バクトウン開始」という「マヤ暦の転換日」に、サパティスタが展開した大規模な動員はいったい何を意味しているのだろうか？なぜ、「沈黙の行進」だったのだろうか？

「聞こえたかい？」

「沈黙の行進」に先立って、サパティスタ民族解放軍＝先住民革命地下委員会（EZLN-CRIC）は、これまで世界を支配してきた「上の人たち」に宛てたコミュニケを発表している。それは、「聞こえたかい？」と題するものだった。

聞こえるはずの音とは、「上の人たち」が支配してきた古い世界が崩壊する音であるという。そして、「より小さき者たち」の世界が再生する音であるという。その音が聞こえるように、サパティスタはスローガンを連呼することもなく、「沈黙の行進」を敢行したというのである。

2012年12月30日付のEZLN-CRICのコミュニケでも明らかにされているように、今回の大規模動員は、約20年前の武装蜂起とは大きく異なるものだった。今回の「沈黙の行進」は、「武器も携帯

せず、死者もなく、破壊もない」ものであった。さらに、1994年1月中旬以降、「対話」という非武装路線を選択してきたサパティスタの特徴とされる「言葉」という武器すらなかった。唯一の武器といえるものがあるとすれば、「サパティスタであること」のシンボルとされる「目出し帽」だけかもしれない。

約1.8万人が収容できるサンクリストバル市大聖堂前の広場が埋め尽くされたサパティスタの動員としては、2003年元旦に行われた「松明の行進」がある。この行進は、2001年2－4月の「大地の色の行進」が行われたあと、約1年半以上も続いた「沈黙」を破る形で行われた。その行進においては、サパティスタ支持者は、赤々と燃える松明とともに、農作業道具でもあるマチェーテで「武装」していた。

しかし、今回の「沈黙の行進」では、一連の「目に見える武器」はいつさい携行されなかった。また、スローガンが連呼されることもなく、「言葉という武器」もなかった。Youtubeなどの動画サイトでは、「沈黙の行進」に関する3～6分程度の動画を10本近く確認できる。それらの動画では、ときおり、散発的に「ビバEZLN」！とか、「ビバ・マルコス！」の声が聞こえるが、それに呼応し唱和する声はまったく聞こえてこない。霧雨の中、簡単な雨具をまとい、水溜りを気にすることもなく、黙々と行進している男女の姿が続く。

統制のとれた規律性、組織性、規模の大きさ、そしてなによりも「沈黙」こそが、今回の行進の最大の武器だったかもしれない。

最大規模の動員があったサンクリストバル市の場合、2万人以上の参加者は、前日から、市中



12月21日サンクリストバルの「沈黙の行進」（柴田大輔）

心部から車で20分ほど北にあるチアパス高地地域の善き統治評議会（JBG）があるオベンティックに集合していた。早朝、参加者たちはバスやトラックでサンクリストバル市の郊外まで移動し、そこから市の中心部へ徒歩で行進した。28班に分けられ行進参加者は、班の番号が付いた目出し帽を被り、早朝から降り出した雨のなか、隊列を組んで市の中心部へと向かった。

朝8時半頃には、最初の隊列は大聖堂前の広場に到着していた。しかし、広場の収容人数の関係から、行進の隊列は蛇行を繰り返し、正午過ぎても、最後尾の隊列は大聖堂前広場に到着できなかったという。サパティスタが模索・実践してきた「自治的統治」の主体として、すべての行進参加者が、大聖堂前広場に木材で設営されたひな壇の上に上った。

「沈黙の行進」の暗示するもの

12月21日のサパティスタの「沈黙の行進」という再登場は、何を告知しているのだろうか？

「沈黙の行進」の当日、大聖堂前に仮設のひな壇が設営された。しかし、壇上でEZLNの司令官たちが演説を行うことはなく、すべての行進参加者

が、整然と隊列を組み、ひな壇に上がり、降りていった。その後、ひな壇は解体され、材木は回収され、行進者によって運び去られた。

このシーンから、サパティスタが模索してきた「上の世界における政治」の在り方とは異なる「自治的統治」の在り方を窺うことができる。すべての人が「命令を下す」政治の主体であるべきである「人々の意見に従って命令する（mandar obedeciendo）」というサパティスタの基本理念をその行動から読み取ることができる。

また、武装蜂起から20年近く経過する中で、サパティスタ運動の中で起きてきた内部構造の変化の一端を観察することができる。その典型的シーンのひとつは、行進にあわせて移動できない子供を抱えている男性の行進者の写真である。従来なら、左側か後の連れ合いの女性が子供を抱えていたはずである。運動の中で、こうした旧来の「習わしであり習慣」が根底から変わっている兆しを読み取ることも可能である。

サパティスタの存在証明としての沈黙

この行進に関して、メキシコ国内のメディアの多くは次のように報道していた。2012年12月の制度的革命党（PRI）のエンリケ・ペニャ・ニエト政権発足にともなって、長期間にわたって沈黙していたサパティスタは、メキシコの政治の舞台に再登場するという選択をした。

2000年12月から2012年11月末までの12年間にわたる国民行動党（PAN）政権のもと、サパティスタはいくつかの重要な政治的イニシアチブを提起し、メキシコの政治の舞台の場にいた。

2001年2月から3月にかけては、1996年の『サンアンドレス合意』に基づく先住民族の権利と文



番号付きの目出し帽で子を抱く男（Proceso, Marta Molina）

化に関する憲法改正を求めて、「大地の色の行進」を展開した。しかし、4月末の議会で、PAN、PRI、民主革命党（PRD）が反動的先住民法を採択したため、EZLNや全国先住民議会（CNI）に結集する先住民運動は、先住民自治の法的保障ではなく、「事実としての先住民自治」をそれぞれの現場で構築するという方針に基づいた活動を行うことになった。

こうして、2003年8月、サパティスタ支持基盤組織の共同体を基盤とするサパティスタ反乱自治地区（MAREZ）、複数のMAREZで構成されるJBGの管轄地域という「事実としての先住民自治」の実践にむけた自治的統治の空間が発足する。チアパス州内には、JBGの事務所がある5つのカラコル（caracol=巻貝）が設立された。

2005年末、EZLNは「第6ラカンドン密林宣言」を発表し、議会政党や既存の政治権力とは「別の空間」で、「別の政治のあり方」を模索・構築する方針が明らかにされる。こうして、2006年1月から、議会政党による票獲得のためのキャンペーンとは無縁の「別のキャンペーン」が展開されることになった。

EZLN司令官や全国先住民議会（CNI）のメンバーは、全国キャラバンを展開することになった。その目的は、国内の先住民、農民、労働者、学生や若者、女性、社会組織など直面している問題を分析し、それぞれの運動体験を共有するなかから、全国的な政治プログラムを策定し、新たな制憲議会を構築しようとするものだった。

しかし、2006年5月2日、メキシコ州のサルバドル・アテンコで土地防衛闘争を展開してきたエヒード住民が州政府によって弾圧される事件が発生した。当時のメキシコ州知事は現在の大統領だった。この弾圧に抗議するため、EZLN司令官たちのメキシコ各地をめぐる全国キャラバンはいったん中断されることになった。10か月近くの中断の後、2007年3月、全国キャラバンは再開されたが、メキシコの市民社会やメディアにとって、「別のキャンペーン」は、もはや何の関心も引かない「流行遅れ」のものとなっていた。

2006年末から2007年末、EZLNはさまざまな国際的呼びかけを行っている。具体的には、チアパス州のサパティスタ共同体で2006年末と2007年夏に開催された2回の「サパティスタと世界の人々の出会い」、2007年10月にソノラ州ビカムで開催された「アメリカ大陸先住民集会」、2007年末にラ・ガルーチャで開催された「サパティスタ女性と世界の女性の出会い」などがある。

一方、メキシコ市民に向かったの広い意味での政治的呼びかけはほとんどなかった。2008年12月末から2009年初頭、国内における人権侵害や社会運動への弾圧に対抗するため、メキシコ市とサンクリストバルで開催された「尊厳ある怒り（Digna Rabia）」が唯一の国内向け呼びかけといえよう。

「胡散臭い沈黙」の期間

EZLN司令官が公の場に姿を現したのは、2011年5月7日が最後だった。その場では、タチョ、セベデオ、エステル、オルテンシア、ダビの5名司令官によって、息子が殺害された詩人ハビエル・シシリアが提起した全国規模の市民運動「正義と尊厳のある平和運動（Movimiento por la Paz con Justicia y dignidad）」に連帯する声明が読み上げられた。それ以降、EZLN司令官は公式の場に顔を出していない。

副司令官マルコスに至っては、こうした場にもまったく姿を現さなかった。2011年12月7日の哲学者ルイス・ビジョロとの書簡の発表以降、副司令官名義のコミュニケや書簡は発表されなくなった。そのため、一部では、パイプ煙草の喫いすぎにより肺癌が悪化し、マルコスの余命はわずかであるという噂などが駆けめぐっていた。カルデロン政権のチアパス問題担当官ルイス・アルバレスは、政府関連の医療機関における癌治療を受診するよう申し出ていた。

こうしたことから、EZLNはメキシコにおける政治勢力としてはほぼ消滅してしまったと、多くのメディアによって報じられてきた。メディアにおいては、EZLN司令官、とりわけ副司令官マルコスが、コミュニケや書簡を発表し、発言することがなければ、サパティスタは活動せず、存在しないという図式が定着していたのである。

EZLN-CRICのコミュニケが最後に発表された2011年5月7日から、「沈黙の行進」の通告があった2012年の12月21日までの約1年半の期間は、サパティスタの「胡散臭い沈黙」の期間と表現されている。

この「胡散臭い沈黙」の期間、JBGは、サパティスタ支持基盤組織に対する準軍事組織の嫌がらせや迫害などに関する27件の告発をサパティスタの公式ホームページEnlace Zapatista (www.enlacezapatista.org.mx) に発表していた。ウェブ上における告発の平均閲覧数は約1500とされるが、それらの情報は、ときおりLa Jornada紙に掲載されることを除けば、新聞記事となることはなかった。一方で、副司令官マルコスが、知識人などを揶揄したカリカチュアなどを発表すると、2日間で5千件以上のアクセスがあったという。

2003年8月のJBG創設以降、JBGの担当委員の言葉こそ、サパティスタの言葉と見なされるようになったはずである。しかし、副司令官マルコス、EZLN-CRICの言葉しか、取り上げないという「メディアによる嘘と無視」の図式によって、EZLNは、活動停止状態、あるいは消滅間近とされてきたのである。

サパティスタ運動は「過去のもの」？

2012年12月のサパティスタの「再登場」に関して、メキシコ社会はどのように理解しているのだろうか？

この問いに対し、Parametriaが1月下旬に実施した調査は一定の示唆を与えてくれるものである (www.parametria.com.mx/DetalleEstudio.php?E=4508)。

調査によると、マルコス副司令官やEZLNの発言を聞いたことのある人の比率は、それぞれ72%と64%に達しているが、12月21日の「沈黙の行進」を知っている人は33%でしかなかった。しかも、回答者の56%は、「沈黙の行進」の意味が分

からないとしている。先住民の権利を守るためという意見を表明しているのは、わずか10%だけである。

アンケートでは、サパティスタ運動を政治運動とする意見が31%、先住民運動とする意見が29%、ゲリラ運動とする意見が23%となっている。これを同社が実施した2003年や2005年のものと比較すると、メキシコの人々のサパティスタ運動のイメージが、少しずつ変化していることが分かる。

この調査によると、サパティスタ運動が「もはや過去のもの」とする意見が37%、「現在も有効である」とする意見が44%となっている。こうした結果を踏まえ、副司令官やEZLNは、人々の記憶の中ではまだ生きているが、現実には「過去のもの」となっていると、まとめられている。おそらく、このような理解がメキシコでは一般的であることは間違いないだろう。

しかし、12月21日の「沈黙の行進」を通告したコミュニケは、『聞こえたかい？彼らの世界が崩れる音。我々の世界が再生する音』と題されていたはずである。サパティスタが実践し模索してきた「別の政治の在り方」に基づく新しい世界は、準備されているのだろうか？

「ラ・セクスタ」の提起

2012年12月30日の年末のコミュニケにおいて、EZLN-CRICは、今後の新しい進路として以下の6点をあげている。

- (1) メキシコ国内の先住民民族 (pueblos originarios) の出会いの場である先住民全国議会 (CNI) には今後も参加する。

- (2) 国内外の「ラカンドン密林第6宣言」の賛同者とのコンタクトを再開する。
- (3) 社会運動が相互に理解しあえる架け橋を構築する。
- (4) メキシコの政治屋連中とは、批判的距離をとる。
- (5) 連邦・州・行政地区など悪しき政府やマスメディアとは別の空間で存在し続ける。
- (6) サパティスタが国内外の先住民族とともに「下から、左からの抵抗と闘争」を展開するに当たっての提起を近日中に発表する。

その後、1月20日から3月13日にかけて、副司令マルコスによる、『彼らと私たち』と題する一連のコミュニケが発表される。彼らとは上の世界の支配者たちであり、私たちとは下の世界の「より小さき者たち」である。このコミュニケは以下の7つのセクションで構成されている。

- 1：上の者たちの理由、
- 2：2頁弱の機械
- 3：労働者管理人
- 4：下の者たちの苦悩
- 5：ラ・セクスタ
- 6：眼差されるもの（6部）
- 7：より小さき者たち（7部）

一連のコミュニケの中で具体的に提起された新しい方針では、2005年末から展開してきたメキシコの「別のキャンペーン（Otra Campaña）」と世界規模で展開された「セスタ・インターナショナル（Zelta Internacional）」を改編することが謳われている。両者を「ラ・セクスタ（La Sexta）」

という形で統合し、サパティスタ運動を展開することが宣言されている。

「ラ・セクスタ」とは、スペイン語で「6番目」を意味する。何の6番目なのか？「ラカンドン密林第6宣言」と関連していることは明白である。もう一つの解釈も可能である。それは、現在の世界は4つの滅びた世界の後に誕生した「第5の太陽（＝世界）」であるというアステカの世界観と関連するものである。この「第5の世界」も、いずれ「地震」によって滅亡し、「第6の世界」が到来するものとされていた。

1985年のメキシコ市の大地震が、その地震に相当すると解釈されることがある。あるいは、1988年の大統領選挙の集計中におきたコンピュータの「システム・ダウン」、1994年末のサパティスタの自治行政地区宣言を契機とするテキーラ・ショックとよばれるペソ切り下げ、さらには2000年7月の大統領選挙におけるPRI独裁体制の終了などが、「第6の世界」到来の予兆と理解されることもあった。いずれにせよ、マヤの予言による「世界の終末」、アステカの「第6の世界」到来と関連して、解釈することもできる。

サパティスタの体験を学ぶミニ学校計画

1月半ばから3月半ばにかけての一連のコミュニケのうち、2月14日と3月17日の二つのコミュニケの署名者は、EZLNの中佐から副司令官に昇格したモイセスである。モイセス署名のコミュニケでは、2013年8月8日から11日まで、JBC創設10周年を祝うフィエスタが5つのカラコルや各共同体で開催されることが予告されている。

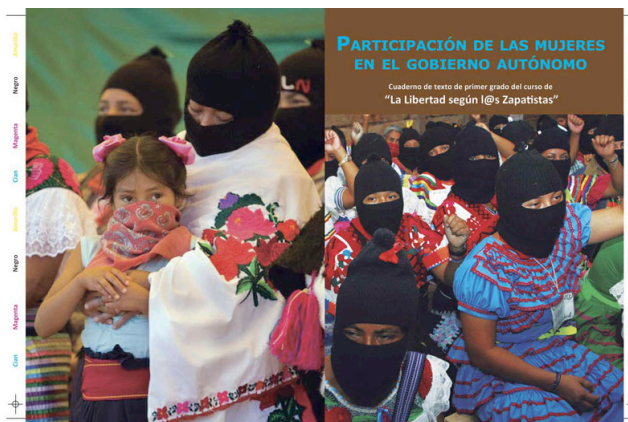
同時に、フィエスタ終了後、サパティスタ・ミ

ニ学校（Escuelita Zapatista）計画が実施されることも告知されている。計画のおおよその内容は以下のようなものである。

サパティスタ・ミニ学校は、JBG事務所のあるカラコルではなく、サパティスタ支持基盤の共同体によって運営されることになっている。8月11日から17日までの第1回初級コースでは、「自治的統治I」、「自治的統治II」、「自治的統治への女性参加」、「抵抗」の4テーマが用意されているという。テーマごとに60–80頁の教科書（20ペソ）が用意されているという。教科書は、5つのJBG管轄地域にある抵抗の共同体における組織作りの体験交流と相互評価のために開催された一連の会合の成果を踏まえて編集されたものという。教科書編集にあたったのは、EZLN-CRICメンバーで構成された「情報委員会」で、その統括責任者の副司令官モイセスが、ミニ学校の校長を務めるという。

「自治統治における女性参加」の教科書の一部は、副司令官マルコスの一連の書簡の「より小さき者たち」の3・4において紹介されている。

コース受講の事前受付は、Enlace Zapatistaのホームページ（www.enlacezapatista.org.mx）で、e-mailを通じて行なわれるとされている。実際の登録はサンクリストバルのCIDECEIで行われる。CIDECEIでの登録後、各サパティスタ共同体での内部規則や生活に関する事前説明を受けることが義務付けられている。ミニ学校計画は、自由のための組織や自治に関する闘争を推進するためであり、EZLNへの参加や軍事面に関心を持つ者は受け入れず、政治的・宗教的宣伝も禁止される。受講者は、コースが実施されるサパティスタ共同体に赴き、地元のサパティスタ家庭に滞在しながら、



「自治的統治への女性参加」の教科書（全76頁）の表紙

コースを受講することになる。経費面に関して、ミニ学校への寄付をCIDECEIの登録時に受け付けるが、CIDECEI以降の移動や滞在中の家庭での食事や滞在費支払いは不要とされる。

また、この日程では参加できないという人々のために、ビデオ教材を使用したコースやサパティスタ領域以外で組織されるコースも準備しているとのことである。

初級コースが終了後、別の共同体で別コースを受講することも可能とされる。この日程では参加できないという人々のために、ビデオ教材を使用したコースやサパティスタ領域以外で組織されるコースも準備しているとのことである。

現時点（3月末）で、ホームページ上における事前登録手続きが始まっている気配はない。今後、計画が変更される可能性も否定できない。

また、ミニ小学校計画に集中するため、JBGの委員、各自治行政地区役員、各プログラムの担当委員は、サパティスタ共同体などへの支援キャラバンや訪問には対応できないとしている。こうした支援・連帯の計画がある場合は、サンクリストバル市のCIDECEIに問い合わせしてほしいとしている。

4年越しで実現！ ワオラニ民族とのビデオ制作プロジェクト

溝口尚美（シネミンガ共同代表）

エクアドル北東部のアマゾンに、ワオラニという先住民族が暮らしている。1970年代から、彼らの領土で、石油開発や森林伐採が断りもなく始まり、以来、環境破壊だけでなく文化消滅の危機に直面しているという。この事実を知ったのは、4年前の2009年5月、ニューヨークの国連で行われた先住民族フォーラムで、ワオラニ民族の代表ペンティ・バイウワに会った時だった。ペンティは、問題を世界に訴えるために、はるばるニューヨークに来ていた。偶然、知人を通じてペンティを紹介され、シネミンガの活動を彼に伝えた。

ペンティが暮らすバメノコミュニティは、1989年に国が設定したヤスニ自然公園の一部で、世界で最も生物多様性に富んだ地域であると同時に、大油田があることでも知られている。2010年にヤスニITTイニシアチブ¹がスタートしたので、ヤスニという名前を知っている人は多いかもしれない。そんな特別な地域からやってきた彼は注目の的で、国連では、取材を受けている姿をよく見かけた。「シネミンガは、世界の様々な先住民の人たちにカメラを渡し、使い方を教え、自分たちで発信するお手伝いをしています」という私の説明に、ペンティは「それこそ、僕たちがやりたかったことだ！」と答えた。撮られる側から発信する側へ。バメノには、インターネットも電話もない。世界中から様々なテレビ局や、ジャーナリストが訪れるが、どんな風に発信されたのかは知る由もない。彼は、自分たちの視点で、自分たちの声を伝えたかったのだ。こういう人にこそ、ビデオカメラを渡したいと思った。



2009年国連にて。ペンティと筆者との初めての出会い

エクアドルのアマゾンへは、交通費と滞在費が案外かかること、シネミンガが既に始めていた他の企画を進めることを優先したせいもあり、ペンティの事が気になりながらも、あっという間に4年が過ぎてしまった。2012年5月、ペンティが再び国連にやってきた。もう待たせてられない。「秋か冬に企画を実現する努力をする」と約束し、安価な時期に南米への航空券を購入した。

その直後、不測の事態が起こった。10月29日、ニューヨークを襲ったハリケーンで被災。1階だった自宅兼オフィスが胸の高さまで浸水し、寄付してもらったカメラを含む、殆どの物を失ってしまった。それでも決行することにした。南米へはコロンビアも含めて1カ月半行く計画だったので、まあ家賃が節約できて良いじゃないかと考えた。それ以上に、4年がかりで作った機会を諦める気にはならなかった。



クラウドファンディングで目標額の5000ドルを達成

問題は、お金だった。ビデオカメラ・パソコン・ソーラーパネルなど。必要な機材を買い揃える為の5000ドルを立替え、クラウドファンディング²で回収することにした。キャンペーンビデオに自ら出演して企画の概要を訴え、ハリケーン直後の家の様子も映像に入れた。ハリケーン被害に対するインパクトが強かったのか、普通は15～20ドル程度が主流だが、50ドル、100ドルと高額を寄付して下さる人が多く、目標額を達成することができた。

2013年1月9日午前11時、エクアドルの首都キトに到着。シネミンガの共同代表のカルロスも一緒だ。彼はコロンビア出身なので、当然スペイン語は出来るし、南米事情にも詳しい。この企画は、2人でないと実現しなかった。

到着後、しないといけなかったことは、ソーラーパネル用のバッテリーの購入だった。飛行機で運ぶことができなかったからだ。既にリサーチしていた会社へ行って、鉛蓄電池を購入。宅急便で、バメノコミュニティに一番近いコカ市のバスターミナルに発送後、空港へ戻り、コカへと飛んだ。

コカのホテルで、ソーラー発電³のテストをした。軽くて巻けるタイプのソーラーパネル・充電コントローラー・バッテリー・インバーター。使用量



ソーラー発電のテストの様子

が1000ワットを超えると、バッテリーが長持ちしないだけでなく、壊れる可能性もあると会社から言われていた。ソーラー発電は初めての経験だったので、ケーブルを接続するのも、ドギマギした。テストの結果、平均的な太陽光の環境のもと、コンピュータでの編集が毎日6時間できると推測できた。

バメノコミュニティへは、カヌーで2日かかる。ペンティが、コカまで迎えに来てくれ、一緒に行った。カヌー乗り場へ車で向かう道中、石油パイプが蛇のように道沿いを這い、石油採掘を示す炎、大きな石油タンクが、森の中に見えるのが、なんとも生々しかった。車道は、石油会社が輸送の為に森を壊して作ったもので、ほんの20年前は、森林地帯だったと知った。「森林破壊・石油開発」を目の当たりにしたショックは、当たり前だが、新聞や本などで読んだ時に起こる感情とは違って大きかった。しかもその問題に幼い頃から直面し、大きな権力と闘っている当事者が側に居るのだから、なおさらだ。これらの問題に興味のある人は、一度でいいから、実際に来て、見て、感じたら良いと思う。

カヌー乗り場には、軍と法務省が管轄するチェックポイントがあり、ヤスニ自然公園へ来る人を、入国管理局のようにチェックしていた。ヤスニには、石油掘削や森林伐採を禁止するインタンジャ

ブルゾーン（不可侵領域）があり、タゲリとタロメナネという、UNCONTACT（アンコンタクト＝外部と触れたことのない人たち）のワオラニ民族がいる。タゲリは、ウォリアー（狩猟者）で、ペンティたちCONTACT（コンタクト＝外部と触れている人たち）と違って、ジャングルで移動しながら暮らしているようだ。

カヌーで出発すると、耳に入るのは様々な鳥の声とカヌーのエンジン音だけ。川岸に居る亀やワニを見ながら、「やっとアマゾンに来た！」という気持ちになった。早速、ビデオカメラを出して景色を撮影。ペンティと一緒に来ていた家族や親戚とも色々な話をしながら、コミュニティへと向かった。

バメノに滞在したのは15日間。最初の3日は、5つのコミュニティの代表が集まり、それぞれの場所で起こっていることを発表するミーティングが行われることになっていた。ペンティが全てを記録したいというので、若者にカメラや録音機器の使い方を教えながら、撮影した。

バメノに来て驚いたのは、電気があることだった。石油会社が開発の代わりに、エクアドル政府に利益の十数パーセントを支払い、政府がインフラ設備や病人などが出た時のセスナ代などをコミュニティに提供するしくみが出来たのだそうだ。ただ、電気をおこすジェネレーターは、決して安定した物ではなく、旅の最後には壊れてし



（上）カヌーの旅 （下）ペンティの自宅でもある集会場でミーティング

まった。修理をする人は遠くに住んでいるので、いつ復旧するかは誰もわからない。日常生活は、なんとかながらも、ビデオ制作には電気が必要だ。環境にも良いソーラーパネルは、今後、もっと持っていきたいと思っている。

このミーティング会場（実はペンティの家）には電気が来ていなかったため、ソーラーパネルが役立った。ヤシの葉で作られた屋根にパネルを紐でくくりつけ、日当りに合わせて場所を変えた。

撮影素材を、滞在中にペンティと一緒に編集し、最後にDVDを作ってプレゼントした。広大なアマゾンで、人を集めてミーティングを行うのはそう簡単ではない。ペンティは、このDVDを参加できなかった沢山の人たちに見せたかったのだ。編集中に「こうやってビデオを活用するのが、僕の夢だった」といわれ、「ああ、来てよかったな」と実感できた。



話を变えて、衣食住について書きたい。私にとっては初めての熱帯雨林の生活。ややこしい虫がいっぱい居るんじゃないか、マラリアにかかったらどうしようなど不安があった。でも、緑があるせいなのかかわからないが、思ったよりも暑くなく、夜は肌寒いぐらいだった。住民はハンモックで眠るが、私



たちは、観光客用だというトタン屋根と木で出来た建物で、マットの上に寝袋を敷き、蚊帳の中で眠った。飲み水は、コカで購入したペットボトル。シャワーは貯めた雨水を使った。食事はできるだけ自炊した。コカで購入した Pasta やパン、トマトやピーマン等を使った炒め料理が殆どだった。ペンティの家で、川魚料理を御馳走になったり、村人たちがハンティングに行った日は、アルマジロやイノシシの肉を食べる機会もあった。

儀式などの文化に触れる事もできた。ミーティングが行われた最初の3日間は、特に面白かった。日が暮れると、人々は毎日、チチャ4を飲み、夜遅くまで踊っていた。そのうちの1日は、結婚式だった。老若男女が、前の人の肩をにぎる

(上) かぶっているのは、鳥の羽と植物で作った冠
(下) 若者たちがメディアセンターで編集を練習

形で列になり、歌いながら歩き回る。新しいカップルを囲んで「今まで君たちは知らないもの同士だったけど、今日からは人生を共にする。愛し合い、寄り添って生きていくんだ」という意味の言葉を、何度も歌っていた。最後にカップルが、チチャを全員にもてなし、セレモニーは終了した。

ミーティング後、コミュニティが通常の状態に戻るのを待って、本格的なビデオワークショップを始めた。残りの滞在日数は10日ほどだが、すべきことは沢山ある。電気も限られ、コンピュータに不慣れな人たちに、ビデオ制作を教えられるのか、不安を覚えながらも、前へ進むしかない。若者を中心に、自由参加型でワークショップをす

ることにした。皆、カメラの扱いはすぐに覚えたが、難しいのはパソコン編集だった。編集は料理と似ている。ここが冷蔵庫で、ここがまな板で……という、コロンビアで培った台所方式で教えた。「習うより慣れろ」。自分たちで撮った映像を素材に編集する作業を何度か試みた。10才から20代が中心の生徒たちは、ビデオ制作に強い興味を示し、簡単な編集は出来るようになった。

嬉しいことは、もう1つあった。村の男たちがビデオ制作専用の建物を作ってくれたのだ。コミュニティがシネミンガを受け入れた証のようで、誇らしかった。ソーラーパネルはもちろん、

パソコンなどの機材を適切な場所に設置した。熱帯雨林の湿気が機材を壊さないか心配だったので、プラスチックの衣装ケースを購入し、日本製の湿気取りを入れて、機材を保管するよう頼んだ。

3月中旬、私たちが去ってから初めて、ペンティがバメノからコカへ出てきたので、話をする事ができた。ビデオ機材は全て問題なく動いていると聞いてホッとした。次の訪問がいつになるかは未定だが、できる限り早めに行って、ステップアップしていきたいと思う。

- 1 ヤスニITT イニシアチブ：エクアドル政府が2010年にスタートした計画。ヤスニ公園のイシュピngo・タンポコチャ・ティプティニ (ITT) に埋蔵する石油採掘を放棄する代わりに、開発で得られるはずだった利益の半分、36億米ドルの支援を世界に求める。(http://www.undp.or.jp/uploads/pdfs/133652577001.pdf)
- 2 クラウドファンディング：ウェブサイトをベースにした募金キャンペーン。目標額と期間を自分で設定し、ウェブサイトを通じて額を達成させるとお金がもらえるしくみ。今回は、“indiegogo”というサイトを使った。(http://www.indiegogo.com/projects/waorani-dima-center)
- 3 ソーラー発電のテストの様子をビデオにしています。(http://blog.canpan.info/cineminga/archive/148) 4 チチャ：ユカ芋を叩いてペースト状にし、お湯を混ぜて飲む。アンデスではトウモロコシを使い、発酵させてアルコール飲料として飲む事が多いが、バメノコミュニティはノンアルコールだった。お腹にたまるので、チチャを食事代わりにする事も多い。
- 3 チチャ：ユカ芋を叩いてペースト状にし、お湯を混ぜて飲む。アンデスではトウモロコシを使い、発酵させてアルコール飲料として飲む事が多いが、バメノコミュニティはノンアルコールだった。お腹にたまるので、チチャを食事代わりにする事も多い。

シネミンガはワオラニ民族への継続支援を募っています。中古または新品のビデオカメラ（写真用カメラも大歓迎）、ボイスレコーダー、更なるソーラーパネルが必要です。また、スペイン語-日本語などの翻訳を手伝ってくださる方がいらっしやると、様々な資料を日本語で発信できるので助かります。募金は、下記の2つの方法で可能です。ご質問はnaomi@cineminga.org まで。

<ゆうちょ銀行の振込> 口座番号：00980-4-226167

加入者名：Cineminga

<クレジットカード> 下記、ブログの左側にある“Donate”ボタンをクリックして下さい。

http://blog.canpan.info/cineminga

「音楽三昧♪ ペルーな日々」と「ラ米百景」は休載しました。

グアテマラ・アップデート リオス・モント元将軍に対する ジェノサイド裁判始まる

新川志保子

さる3月19日より、エフライン・リオス・モント将軍（現在86歳）に対する内戦中のマヤの人びとへのジェノサイドおよび人道に対する罪を裁く裁判が始まった。リオス・モントは軍事クーデターで政権につき、1982年3月から1983年8月まで大統領だった。そして36年間におよぶ内戦中、軍による暴力が最も吹き荒れたのが彼の政権だった。国連の真相究明委員会報告によると、1981年から1983年までの3年間に人権侵害の81%が起きている。そして約半分(48%)が1982年に集中している。この報告は、グアテマラ軍はマヤの人びとをゲリラの温床であり「内部の敵」と見なしていた。そしてできるだけ多くを殺そうと大量殺戮を繰り返した。キチエ州イシル地域では村の70%から90%が破壊されたという。

人権リーガルアクション（CALDH）と正義と和解のための協会（AJR、内戦の被害者で作られている）の委任によるグアテマラ人権弁護士事務所が2001年に検察に告発したのが始まりで、リオス・モントが国会議員をやめ、免責特権を失った今年1月に訴追され、今回の裁判となった。元国家元首がジェノサイドの罪で自国で裁かれるのは世界で初めて。リオス・モントの他に当時の軍諜報機関（G2）トップだったマウリシオ・ロドリゲス・サンチェスも被告となっている。

今回の裁判は、1) イシル地域におけるジェノサイドと、2) ドスエレス虐殺事件（直接の加害者はすでに有罪判決が確定）の二つに関して行われる。イシル地域に関しては、1982年3月から1983年8月までの期間に起こった住民に対する15の虐殺事件を命令した責任が問われる。これら虐殺により1,171人が殺害され、29,000人が避難民となった。拷問、女性への性暴力についての責任も問われる。ロドリゲス・サンチェスは同地域における軍事計画を立案、イシル地域での民間人殺害の責任が問われる。ドスエレス事件については、2012年5月ドスエレス村で201人が殺害された虐殺事件の責任が問われる。



今回の公判はイシル地域に関するもので、ドスエレスはまだ公判の時期が確定していない。

リオス・モントは事件に直接関わっていない、虐殺を命令していない、としてすべての容疑を否定している。また、ジェノサイドはなかった、としている。

公判はまず被害者の証言があり、それから専門家証言となる。証言者の数が多いため、かなり長くなることが予想される。元独裁者は被告席に座って「被害者の真実」を聞き続けなければならない。公判はテレビやラジオ、インターネットで中継しており、より多くの人が内容を知ることができるようになっている。今回の裁判の目的は責任者を裁く他に、内戦で何が起こったのかを明らかにすることでもある。その意味でも今回の裁判は非常に重要な意味を持つ。

レコムはイシル地域と間接的な関わりを持っている。2000年に歴史的記憶の回復（レミー）プロジェクト関係者を日本に招いてスピーキングツアーを行ったが、その時集まったカンパはイシル地域ネバフという町での秘密墓地発掘の費用として使われたからだ。発掘された遺体は墓地に埋葬されたが、墓標には「víctima de violencia(暴力の犠牲者)」と書かれてあり、遺族らの無念さや怒りが込められている。

参照：インターネット版Prensa Libre紙
<http://www.riosmontt-trial.org/>

日本ラテンアメリカ子どもと本の会 (CLIJAL)の活動から 心をつなぐ心配ひきうけ人形

内野史子

今回は、私たちがよくワークショップでとりあげてきた「心配ひきうけ人形（スペイン語でmuñeco de quitapenas またはmuñeco de quitapesares）」のことをお話ししましょう。

心配ひきうけ人形と外国籍の子どもたち

私がお人形に出会ったのは、アンソニー・ブラウンという英国の絵本作家の『びくびくビリー』（評論社）の絵本の中でした。いろいろなことが心配で眠れないビリーに、おばあちゃんがくれたのが、この小さな心配ひきうけ人形でした。心配ごとを人形に打ち明けて、枕の下に入れて眠れば、人形がかわりに心配してくれるから、ぐっすり眠れると。そして、この絵本の最後に、このお人形はグアテマラに昔から伝わる人形だと紹介されていました。

中米の小さな国グアテマラで作られるという、この手のひらにのるくらいのお人形の話に私はすっかり魅せられました。しかも驚いたことに、外国の民芸品を扱う近所の店で、絵本で見たとおりの、本物の心配ひきうけ人形が売られていたのです。この絵本の読み聞かせの後に、子どもたちにお人形を配る—そんな光景が、ふと頭に浮かびました。

実は私は、自分の住む千葉県八千代市の小学校で読書指導員をしています。勤務している小学校の児童数160名のうち11名が南米を中心とした外国籍児童（3.11以前には約1割いました）ですが、こうした子どもたちの日本語支援の授業でも、絵本の読み聞かせをする機会があります。これまでも、プエルトリコからアメリカに引っ越してきた移民の少年の話『ぼくのいぬがまいごです！』（エズラ・ジャック・キーツ&パット・シェール作／徳間書

店）や、ボリビア人の父親と日本人の母親の間に生まれた少女が、両国の文化を比較して語る絵本『わたしはせいりか・ガブリエラ』（東郷聖美作／福音館書店）など、外国籍の子どもたちに共感できそうな絵本を選んで読んできましたが、『びくびくビリー』は、中南米に限らず、どの国の子どもにも通じる、“不安な心”を軽くしてくれそうな絵本です。

絵本の読み聞かせの後に、グアテマラから渡って来たお人形の実物を見せれば、それは非常にわかりやすい異文化理解のきっかけになると思いました。

この私の思いを実現する機会は、2011年の夏、八千代市在住の全外国籍児童を対象として行われた夏休みの日本語教室「サバイバル日本語教室」でめぐってきました。アジア、南米、アフリカ国籍の18名の子どもたちに『びくびくビリー』の読み聞かせをし、地図でグアテマラの位置を確認後、この2センチほどしかないお人形をひとりひとりの手のひらに載せてプレゼントできたのです。子どもたちはお話を楽しみ、あまりの小ささに驚きながら、絵本から飛び出してきたような本物のお人形を喜んで持ち帰りました。

心配ひきうけ人形は

グアテマラに昔から伝わるものか？

この実践の報告が、2011年12月の図書展でこのお人形のワークショップのアイデアにつながりました。しかし作り方の情報を集め始めたとき、「でもグアテマラの伝統的な人形っていうのは本当？」という疑問が浮上しました。そこで資料を探したりグアテマラに詳しい方にたずねたりして調べましたが、ある外国人男性もしくは旅行者が作り始めたも

のが広まったようだということ以上は判然としません。伝統ではないが、民族衣装のはぎれや糸を活用して民芸品となり、現金収入の元となったのかもしれない。ともかくグアテマラの民芸品として定着しているのは確かなので、お人形づくりのとき、はっきりしないこと自体も情報として、この由来探りの過程も説明しようという結論に至りました。

また、この調査の過程でうれしい出会いもありました。グアテマラ育ちのIBBY（国際児童図書評議会）元会長

アルダナさんにたずねたとき、チリの団体Lectura Vivaのマリアへさんが、2010年2月の地震のあと、この人形を子どもたちと作っていたという情報を得ました。連絡をとってみると、マリアへさんは、地震のあと不安をかかえる子どもたちに絵本を届ける活動を始めたとき、絵本を読んで人形を作る活動をしていたことがわかりました。お人形が縁で出会ったこの南米の地震国の子どもたちのことも、日本で伝えていきたいと思いました。

心配ひきうけ人形から広がる輪

モール1本と短く切った毛糸4色を使って、子どもでも簡単に作れる私たちの心配ひきうけ人形は、グアテマラの職人が作る動画やアメリカで活動するスペイン語教師の方のサイト等などを見て、メンバーの一人があみだしました。小さく切った布を巻けば、女の子になります。図書展では、由来やチリの子どもたちのことを説明したパネルを展示し、『びくびくビリー』の読み聞かせをしてからお人形づくりをしました。最近眠れないから、と一生懸命お人形を作る少女、眠れないのは子どもだけじゃないわ、と苦笑いしながら楽しむご婦人……。作り方を説明する私たちも、指を動かす参加者たちも、ビ



リーのお話を聞いてからのお人形作りは何か特別なものができあがるわくわくする気持ちを感じずにはいられません。そして、出来上がった、それぞれに個性のあるお人形たち。参加した男性までがうれしそうに持ち帰る姿に思わず笑みがこぼれます。

その後、メンバーの一人がラテンアメリカを描いた絵本について若いお母さん方に話をする機会があり、そのときにもこのお人形づくりをしました。自分でお人形を作って持ち帰ることで、中南米を身近に感じ、講演もより印象深くなったようでした。絵本、この心配を引き受けてくれる頼もしいお人形とその背景、そして自らの身体経験の3つセットにしてラテンアメリカに近づけるこのワークショップに手ごたえを感じています。ご興味のある方は、会までご連絡ください。多くの出会いにつながればうれしいです。

農民の子

ぼくは農民の子です
ボリビアに生まれました
先祖の人たちに見守られた
荒涼とした高原のような子です

農民の子です
寒い高原に住んでいます
凍った大地を走り回ります
とても強い子です

両親は農民です
山の上で笛を吹きます
牛と羊と一緒に生活し
素晴らしい牧草地帯に放牧します

農村で成長しました
太陽の光と共に歩み
月の明かりと共に生活します
夜明けとともに畑に働きに行きます

先祖の農民たちの孫です
雨の日も家畜の放牧します
雹が降っても家畜と一緒にいます
雷の中でも走り回ります
とても強い子です

第一回アイマラ学童児童詩コンクール、
1999年より
編集：サンガブリエルラジオ放送
訳：栗原重太

アボカドソースの豚肉ソテー

Carne de Cerdo en Salsa de Aguacate

今回も、おいしくて経済的で簡単な料理を紹介します。

今回使うアボカドは、メキシコ料理ではとても大切な食材です。

アボカドは、まさに「植物のバター」です。必須脂肪酸や、消化がよく血中コレステロールに悪影響を与えない高品質なタンパク質を含んでいます。血糖値を安定させるため糖尿病の病患者も心配せずに食べることができ、葉酸やビタミンA、B1、D、B2、B3、E、Dを含むため、妊婦さんにもぴったりのです。

抗酸化作用によって老化を遅らせ、がん細胞を抑制する効果も期待できます。骨の強化や視力の改善、風邪の予防、神経系の健康にも役立つとされています。

乾燥やしわを防ぎ肌を若く保つ効果があり、多くの人が、アボカドとひとさじの蜂蜜で顔をパックします。30分間あてて水で洗い落とすと、すっきりします。髪の毛にもよいため、アボカドのシャンプーも売られています。

aguacateという名の起源は、アステカ人の言語であるナウアトル語の“aguacátl”という単語です。



熟したアボカドは冷蔵庫に保存し、切り分けただけは、できるだけ早く食べましょう。切ったのに使いきれなかったときは、オリーブオイルかレモン果汁をかけておきます。

アボカドが熟しているかどうか見極めるには、指で軽く押ししてみたり、振ってみて種が動く音がするか確かめます。からからと音がしたら、十分熟しています。

とてもおいしいので、食べ過ぎないように注意しましょう。どんな体によいものでも食べ過ぎは禁物です。

■材料 4人分

- ・厚切りの豚肉 400g
- ・熟したアボカド 1個
- ・牛乳 500ミリリットル
- ・熟したトマト中 2個
- ・タマネギ中 1/2
- ・塩・こしょう
- ・サラダ油

■作り方

1) 最初に、アボカドおソースをつくる。アボカドを適当に切って、種と皮を取り除く。ミキサーに入れ、牛乳を加え、コショウと塩をほんの少しだけふる。

- 2) ミキサーにかけたものを鍋に移し、弱火で10分間ほど混ぜながら加熱する。焦げたりあふれたりしないように気をつける。
- 3) トマトとタマネギを細かく刻む。
- 4) トマトのソースと、タマネギのソースの2種類を準備する。
トマトのソースは、大さじ1杯の油で刻んだトマトを炒め、コショウと塩で味をつける。
タマネギのソースは、大さじ1杯の油を加え、塩こしょうをする。
- 5) 厚切りの豚肉を大さじ2杯の油で炒め、塩とコショウで味をつける。
- 6) 大きめの平皿にアボカドソースをしいて、焼いた肉をのせ、最後にトマトとタマネギのソースを肉の上にかける
- 7) フランスパンかごはんといっしょにどうぞ。

ニカラグア 先住民と違法植民の紛争

ニカラグアのボサワス保護地区にあるマヤグナ民族のサウニ・アルンカ・テリトリーへの違法植民が問題になっている。すでに1000家族以上がテリトリーの40%超を不法占拠し、牧畜や農業によって森林を破壊しているとして、テリトリーのリーダーらは最高裁や検察に告発している。同テリトリーは2010年に民族の共有地として所有権が認められている。490平方キロメートルの土地に8つの共同体があり4800人が居住する。先住民が保護地区への侵入を防ぐため道路封鎖したところ、60人の違法植民者が強行突破をはかったことから衝突が起きた。植民者側は農業や牧畜のために先住民の土地を開放するよう政府に要請。マヤグナ民族側は、ニカラグア大西洋岸自治地域の先住民による共有地所有を認めている法律を尊重するよう政府に求めている。ボサワス保護地区はサウニ・アルンカのほか3つのマヤグナ民族テリトリーがあり、ほかにミスキート民族のテリトリー2つと、マヤグナ・ミスキート共同のテリトリーが1つある。サウニ・アルンカ・テリトリーが太平洋岸地域に接しているため、違法植民の被害を最も受けている。(Noticiasaliadas 2013/02/14より)

ペルー アマゾンで金採掘による水銀汚染問題

ペルー・アマゾン一帯における調査によると、金採掘の増加に伴い、精製に使われる水銀の量が増え、それが健康問題を起している。アマゾンの都市プエルト・マルドナドでは、人口の80%が水銀に触れており、危険なレベルにまで達している。水銀は金を違法に発掘する際の精製に使われる。ペルーは南米で最も水銀を輸入しており、昨年は水銀汚染を食い止めるためにその使用を制限したが、金の値段が上がったために守られなかった。(BBCMUNDO 2013/3/21, 2013/1/11より)

ラテンアメリカ 続くジャーナリストの暗殺

2012年、ラテンアメリカでは45人のジャーナリストが殺害された。ラテンアメリカジャーナリスト連盟によると、内訳はメキシコ17、ブラジル10、ホンジュラス9、ボリビア4、コロンビア2、アルゼンチン1、エクアドル1、ハイチ1—だ。メキシコとブラジルの被害者の大部分は麻薬グループに殺害されている。ホンジュラスの場合は2009年のクーデター以降続く政治的暗殺だとしている。(noticiasaliadas 2013/1/23より)

ボリビア 初のアイマラ女性大使

2013年2月9日、アイマラ先住民女性のサンタマリア・ママニ（41）がボリビアで初めての在エクアドル女性大使に任命された。ママニは高地先住民女性の伝統衣装を着て宣誓した。ラ・パスの先住民農民組織センターのリーダーで農学者。(BBCMUNDO 2013/02/08より)

ボリビア アイマラ人俳優 スペイン映画で新人男優賞

ボリビアのアイマラ人俳優ファン・カルロス・アドゥヴィリは、スペイン映画Tambien la Lluvia でゴヤ賞の新人男優賞を受賞した。映画は13部門を受賞。監督はスペイン人のイシアル・ボリャン。ストーリーは、ボリビアのコチャバンバで、「水戦争」と呼ばれる水の私有化に反対するデモが起きた事件を描いている。水闘争はエボ・モラレス大統領が就任する2006年まで続いた。アドゥヴィリはコチャバンバのエル・アルト市出身で、鉱山夫の父と羊飼いの母のもと、7人兄弟の6番目に生まれた。アドゥヴィリはエル・アルト市で映画学校で教えており、今回の受賞によってシナリオのクラスに毎月228ドルが支給される。映画学校は他に4校あるが、授業料が無料なのはここだけ。先住民の若者が未来のアドゥヴィリを目指して学んでいる。ボリビアでは能力のある若者は多いが、チャンスや資金が不足しているという。(BBCMUNDO 2011/01/14より)

みなさん、こんにちは。今年も決算月がやってきました。今年度はスピーキングツアーを開催し、各地でお世話をしてくださったグループや支援者の方々のおかげで、多くの参加者がありました。講演が終わった後も温かい余韻が残るいいツアーだったと思います。また、講演会だけでなく、総会や、印刷・発送作業に参加してくださった方々とも新しい出会いがあり、レコムの活動に新たな刺激を与えてくださいました。この刺激が嬉しくて、レコムの活動について、もっと多くの方と一緒に話し合っ、具体的な活動に意見を反映させていけたらいいなあと思いました。オープンな楽しい集まりの機会をたくさん持つことがレコムの原動力であると再認識したところです。ぜひ、気楽にご意見やご提案を送ってください。総会や印刷・発送作業にもどんどんご参加くださいね。（大西裕子）

次回「そんりさ」印刷作業は東京で 月 日、
 発送は京都で 月 日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| Vol.141 メキシコ・ナルコ回廊再訪 | Vol.137 グアテマラ視察報告 |
| Vol.140 グアテマラ・戦時下の性暴力 | Vol.136 ボリビア先住民族政治と道路建設 |
| Vol.139 グアテマラ・沈黙を破る女性 | Vol.135 あるコロンビア難民の死 |
| Vol.138 パナマ先住民族ンガベ・ブグレ | Vol.134 グアテマラ・ニカラグア報告 |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>
 80万7034円

<グアテマラ基金>
 65万6560円
 (2013年3月現在)